

上原遺跡試掘調査報告書

昭和61年3月

河内長野市教育委員会

序 文

河内長野市は、大阪府の東南部、金剛・葛城・岩湧とつらなる山々にかこまれた清らかな山河と澄み切った大気の中で古来より、多くのめぐまれた文化財を伝えているまちです。

文化財は、わが国の歴史・文化等を正しく理解していくうえで欠くことのできないものであり、また将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

しかし、このように保存伝承されてきた文化財も、最近の多くの開発行為により失われつつあります。

今回の調査は、河内長野市上原地区における区画整理事業予定地の一部を試掘した結果ですが、昭和59年度に当該区画整理事業予定地の埋蔵文化財の分布調査を実施しており、より明確に埋蔵文化財包蔵地を確認するために実施しました。なお今回の調査には塚穴古墳としてよく知られている古墳も調査対象として含まれております。

最後に、調査を実施するにあたっては、大阪府教育委員会をはじめ多くの方々から御指導・御協力を賜わったことをここに記して厚く感謝の意を表します。

昭和61年3月

河内長野市教育委員会

教育長 平井 義信

例　　言

1. 本書は、河内長野市教育委員会が河内長野市都市整備部から依頼を受けて行なった河内長野市上原地区に所在する上原遺跡の試掘調査結果である。
2. 調査及び本書刊行に係る経費は河内長野市が負担した。
3. 調査は、河内長野市教育委員会社会教育課文化係が実施し、係員尾谷雅彦が担当し係長加藤博章、係員橋本亨、同谷由美がこれを補佐した。
4. 本書は、加藤博章、尾谷雅彦、亀山隆が分担執筆した。
5. 現地調査において、福武世志子、東野麻衣子、岡山かおり、金田佳子、トレースにおいて、四宮かよ子、明地奈緒美が協力した。
6. 現地調査から報告書刊行まで、地元関係者の方々、河内長野市都市整備部地域整備係長金岡光重、同係員井上仁孝、大手前産業株式会社、(財)大阪文化財センターの協力を得た。

I. はじめに

1. 調査に至る経過

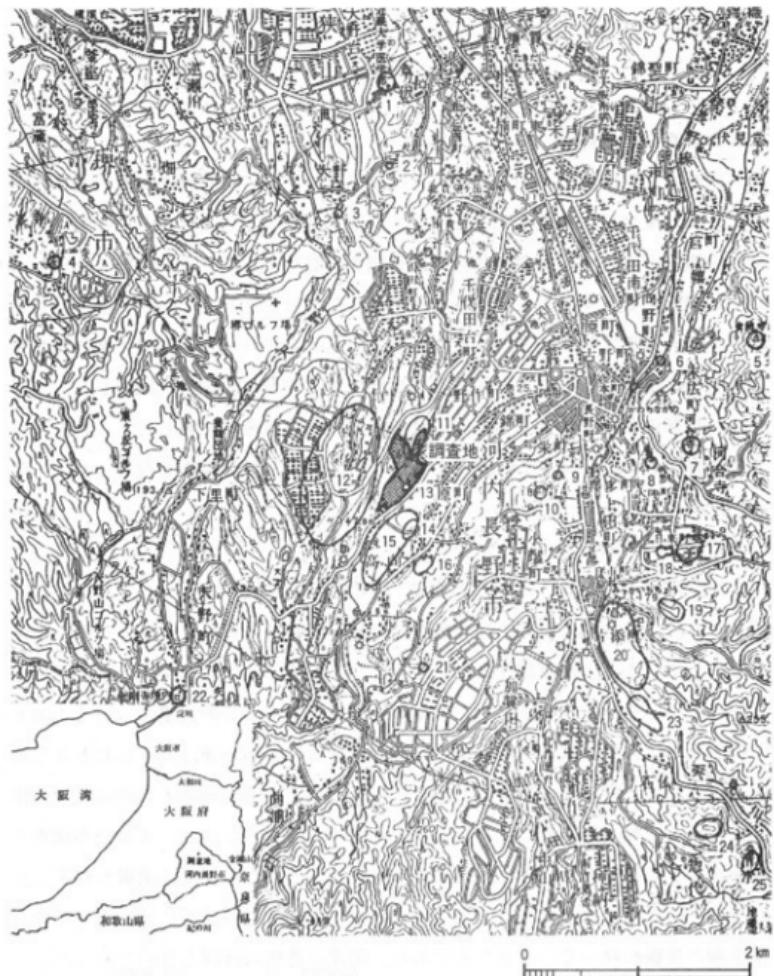
河内長野市整備部は河内長野市上原町地区において区画整理事業を計画するにあたり、対象地域の埋蔵文化財の存在の有無を確認する為に河内長野市教育委員会と協議を行なった。教育委員会は分布調査が必要であり、(財)大阪文化財センターに調査を委託するように回答し1985年4月17日～20日まで分布調査が行なわれた。その結果、対象地域内に遺物の散布が認められた。この結果に基き市教育委員会は、事業遂行に当り試掘調査が必要である旨都市整備部に回答した。これをうけた都市整備部は公共用地内の試掘を市教育委員会に依頼した。これを受けた市教育委員会は1986年2月24日から～3月4日まで試掘調査を行なった。

2. 調査の目的

今回試掘の対象となった場所は国道170号線の北西側約4954m²の公共用地の1部である。この地域は前回の分布調査の結果、広範囲に渡って土器や石器、埴輪が散布していることが確認されていた。また、国道の北西側に接して塚穴古墳と呼称されている横穴式石室をもつ古墳が位置している。この古墳についての地元での伝承では、大阪城の石垣を築くためにこの古墳の石を運ぼうとしたところ疫病がはやり元の所へ築き直したと伝えられている。今回の試掘の目的はこの古墳が言い伝えどおり積み直したものか、原位置にあるものなのか、また分布調査で遺物が中心的に散布していた場所よりは離れているがこの位置に遺構が存在しているのか確認することである。また、今回の試掘場所の段丘面には市内では希な条里制の景観が残っているところであり、関連の遺構の確認も目的であった。

3. 位置と環境

河内長野市は大阪府の東南部に位置する人口約97000人、面積109.6km²で行政的には北は富田林市・千里赤坂村、西は狹山町・堺市・和泉市と接し、南は府県境を成し和歌山県・奈良県と接する。江戸時代までは河内国錦部郡に属し和泉国、大和国、紀伊国と接していた。



- | | | | |
|------------|-------------|-----------|----------|
| 1. 茅莧木遺跡 | 8. 末広塚跡 | 15. 高向遺跡 | 21. 宮山古墳 |
| 2. 小山田2号古墳 | 9. 鳥帽子形山古墳 | 16. 懿持寺跡 | 22. 金剛寺 |
| 3. 小山田1号古墳 | 10. 鳥帽子形山城跡 | 17. 大師山遺跡 | 23. 石仏遺跡 |
| 4. 法道寺 | 11. 棚原窯跡群 | 18. 大師山古墳 | 24. 石仏城跡 |
| 5. 金胎寺城跡 | 12. 長池窯跡群 | 19. 片添城跡 | 25. 左近城跡 |
| 6. 古野古墳 | 13. 塚穴古墳 | 20. 三日市遺跡 | |
| 7. 河合寺 | 14. 高向遺跡 | | |

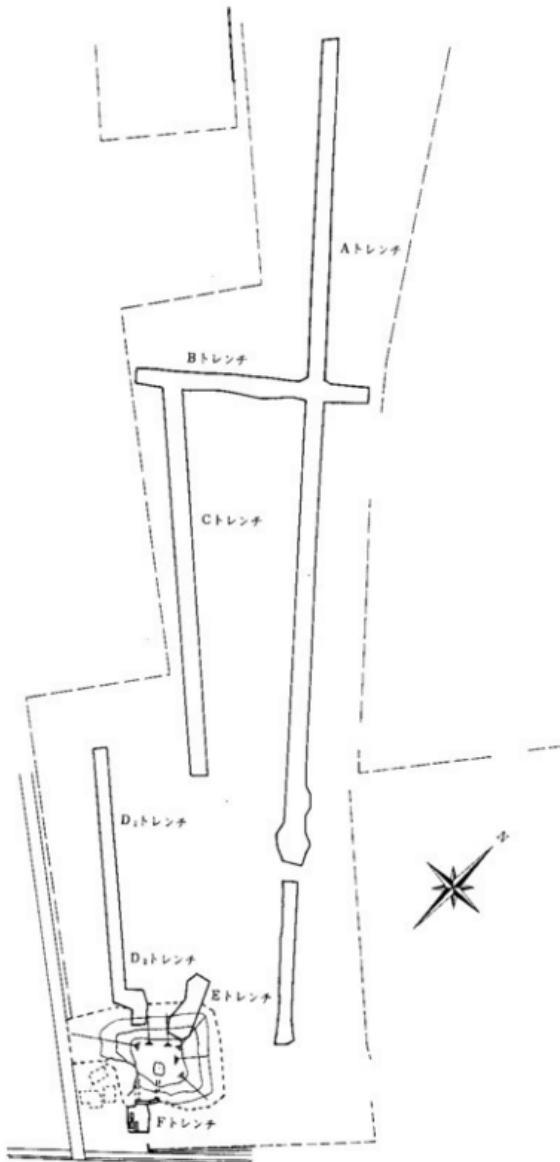
第1図 調査地周辺の遺跡分布図(1/5万) 国土地理院発行5万分の1地形図五条を用いた

地形的には市域の70%が山地地形を成す。大和川の支流石川はこの山間部に源を成す小河川が本市長野町付近で合流して北流するものである。これ等の小河川の内、滝畠地区に源を発する西条川が狭谷な河谷を形成しながら流れ高向地区付近から西側に標高140mの河岸段丘を形成する。この河岸段丘は北東に向って幅を広げる。遺跡はこの河岸段丘上の西側丘陵に接するように広がり、遺跡の東側には国道170号線が走る。

河内長野市域には数多くの文化財が分布している。市域に始めて人々の活動が認められたのは旧石器時代で当遺跡から東3kmの三日市遺跡、北1.5kmに位置する寺ヶ池遺跡から旧石器が発見されている。縄文時代になると同じく三日市遺跡から早期の土器や石器が、寺ヶ池遺跡から石器が見つかっている。弥生時代中期では塩谷遺跡が北西3kmに、三日市遺跡からも堅穴式住居が確認されている。後期になると高地性集落として著名な大師山遺跡が東3kmに所在する。古墳時代に入ると大師山遺跡の近くに前期の前方後円墳の大師山古墳が築かれる。中期には三日市遺跡に円墳が作られている。更に後期では、三日市遺跡や南2kmの宮山古墳や東2kmの鳥帽子形古墳、更に北西2.5kmの五の木古墳が分布している。奈良時代ではすぐ南1kmの高向遺跡、北西2.5kmの小山田火葬墓が所在する。平安時代は市域が觀心寺や金剛寺、岩清水八幡宮などの有力寺院の莊園となる。鎌倉から室町時代の集落遺跡では天見川ぞいに北から三日市遺跡、石仏遺跡、清水遺跡、千早口南遺跡、天見駅北方遺跡、蟹淵中遺跡、寺院では南2kmの日野觀音寺跡、東2kmの長野神社遺跡、神社では鳥帽子形八幡宮が所在する。また、この時代特に南北朝動乱から応仁乱において市域には城砦が数多く築かれている。当遺跡から東2kmに鳥帽子形城、南2kmに仁王山城、南3kmに稻荷山城が築かれている。

4. 現況

塚穴古墳は現在、南側に開口し内部には多量の土砂が堆積している。また、この古墳は現在民間信仰の対象となっており、多くの石造物が建られている。墳丘の上にも石塔が建られている。他は荒れ地となっているがその以前は水田となっていた。この一帯は前述のとおり条里景観が残っている。



第2図 トレンチ配置図

5. トレンチの設定

トレンチはA、B、C、D、E、Fの6本を設定した。この内D、E、Fは現塚穴古墳の墳丘に設定した。特にFは南側の開口部前に設定した。いずれも幅は1.5mとし深さ1mで地山の確認まで行なった。

II. 調査の結果

1. Aトレンチ

長さ100m、東西方向に設定したトレンチである。

層序 基本的には上層から攪乱層（層厚60cm）、耕土層（層厚10cm）、灰色シルト交り細砂層（層厚4cm）、赤褐色細礫交り粘土層（層厚4cm）、地山となる褐色玉石交り粘土層となっている。しかし、トレンチ北端から約7m南までには赤褐色玉石交り粘土層と地山層の間には灰褐色細砂交り粘土層（層厚10cm）と赤褐色玉石交り粘土層（層厚6cm）が挟在している。

この層順の高さは現地表で北端でTP+141.8m、南端でTP+142.2m。地山で北端TP+141.2m、南端でTP+141.2m。地山はフラットな堆積となっている。

遺構 北端から約13mの位置で幅40cm、深さ10cmのピットがあった。また、北端から約7mに堆積している灰褐色細砂交り粘土層と赤褐色玉石交り粘土層は堆積状況から水田遺構の可能性がある。

遺物 出土しなかった。

2. Bトレンチ

長さ23m、南北に設定したトレンチでAトレンチ西端から35mの位置で直交する。

層序 基本的にAトレンチと大過ない。上層から攪乱層（層厚40cm）、耕土層（層厚30cm）、灰色シルト交り細砂（層厚5cm）、赤褐色細礫交り粘土（層厚10cm）、地山となっている。

層順の高さは現地表面の西端でTP+141.8m、東端でTP+141.7m地山の高さは西端でTP+141.5m、東端でTP+142mとなり地山は東に向って若干さが

る。

遺構 検出されなかった。

遺物 出土しなかった。

3. C トレンチ

長さ34m、東西に設定したトレンチでB トレンチの南端から2.5mのところで直交している。

層序 基本的には他のトレンチと変わらない。上層から擾乱層（層厚40cm）、耕土層（層厚20cm）、灰色シルト交り細砂層（層厚5cm）、赤褐色細礫交り粘土層（層厚10cm）、地山となっている。

この層順の高さは現地表で北端でTP +142.0m、南端でTP +142.4m。地山で北端TP 141.4m、南端でTP +141.5m。フラットな堆積となっている。

遺構 北端から約11mのところに幅1.8m、深さ25cmの土壤状の遺構があり埋土は褐色粘土であった。

遺物 出土しなかった。

4. D トレンチ

長さ25mの東西方向に設定したトレンチである。

層序 基本的には他のトレンチと変わらない。上層から擾乱層（層厚30cm）、耕土層（層厚30cm）、灰色シルト交り細砂層（層厚5cm）、赤褐色細礫交り粘土層（層厚10cm）、地山となっている。しかし、南端から7mまでには地山と赤褐色細礫交り粘土との間に明赤褐色細礫交り粘土（層厚10cm）を挟み、更に南端近くでは層厚が30cmになり下層に灰色シルト質粘土を挟む。

この層順の高さは現地表で北端でTP +142.3m、南端でTP +142.2m。地山で北端TP +141.7m、南端でTP +141.5m。地山はフラットな堆積となっているトレンチ南端2mで10cm程度さがる。

遺構 南端から3mのところで幅25cm、深さ30cmのピットがあり、更に南端でみられる灰色シルト質粘土は現塙穴古墳の墳丘基底部で確認されている層順である。また、南端から1.5mで赤褐色細礫交り粘土層が30cm程度さがるところは周溝の可能性がある。

遺物 出土しなかった。

5. D 2 トレンチ

D 1 トレンチより北に 2 m 離れて現墳丘の中程まで約 3 m 設定した。

層序 トレンチの北側 1 m は擾乱層、更に墳丘上まで擾乱層が盛られている。旧地表面（墳丘）はトレンチ北端から 3 m の位置から盛り上っている。3 m までは上層から旧表土・耕土（層厚 40cm）、浅黄色玉石交り土（層厚 50cm）、灰色シルト質粘土（層厚 20cm）、地山の堆積で、旧表土 T P + 142.4m 地山で T P + 141.5m。

遺構 現墳丘以外は検出されなかった。

遺物 浅黄色玉石交り土から近世瓦片が出土した。

6. E トレンチ

D 2 トレンチの北側 3 m に長さ 7.5m のトレンチを墳丘中程まで設定した。

層序 このトレンチも D 2 トレンチと同様に擾乱層の盛土が 30cm ~ 80cm なされていた。トレンチの東端から 2.5m までフラットでそこから急激に立ちあがる。上層から旧表土層（層厚 10cm）、耕土（層厚 20m）、浅黄色玉石交り土（層厚 50cm）、灰色シルト質粘土（層厚 20cm）、地山となり、旧表土 T P + 142.4m、地山 T P + 141.5m。

遺構 現墳丘以外は確認できなかった。

遺物 出土しなかった。

7. E トレンチ

国道の西側、現古墳の開口部の前庭部に長さ 3 m × 幅 2 m に設定した。

層序 東側断面で見ると現表土から 1.1m まで掘削したが -90cm まで最近の盛土が 3 回なされていた。その下層にようやく耕土層（層厚 20cm）が現われたが層中には焼土の細片やスラグ状のものが交っていた。そしてこの耕土直下はすぐ地山であった。上層の盛土中には古墳の石材と考えられる石がおかれていた。北側は現石室の開口部であったことも盛土が 50cm で基底部に使われている花崗岩の板石を区切りとして下層は東側と同様に耕土が見られた。

遺構 現石室の 1 部が確認された。

遺物 出土しなかった。

III. 石造遺物

現在、塚穴古墳の周囲には、数十基の石造遺物が見られる。これらの石造遺物は、その大半が原位置及び原型を保ってはいない。しかし乍ら、かつて塚穴古墳に塚堂と称される小堂の存在が伝承されていること、さらに、横穴式石室の再利用方法として、祠などの宗教的な再利用が多々見られることから、近世に塚穴古墳が信仰の場所としての機能を持っていたことがうかがえる。以下主たる石造遺物についての概観を述べる。

1. 宝篋印塔 (①)

相輪部、塔身部を欠失する。又、笠部は墳丘上の層塔の基礎に転用されている。基礎部下、反花は複弁八葉、塔身下反花も複弁八葉である。材質は花崗岩である。

基礎部の四面に銘が見られ、宝曆7(1757)年に、上原野村、惣作村の念佛講中によって、西國三十三ヶ所巡礼の終了を記念して建立されたものであることがわかる。又、実際に西國三十三ヶ所巡礼を行ったのは、加賀國の禪心であったことも示されている。

西國三十三ヶ所巡礼碑は畿内では各所に見られるが、形態は板碑・自然石・觀音像・宝篋印塔など様々なものが見られるものの、その所在地は、墓地あるいは主要道路の辻堂などに比較的限定できる様である。

2. 宝篋印塔 (②)

砂岩一石で作られており相輪部を欠失する。年号銘の半分を欠失しているが、慶長年間であることは間違いない。

残高は38mを計る。基礎と塔身の間に非常に簡略化された複弁の反花を持つ。全体的に扁平な形を示し、隅飾もやや小ぶりである。

普通は小型の宝篋印塔の場合に相輪は別々になるが、この場合はホゾ穴が全く見られないことから相輪を含めて一石で作っていた可能性が高い。

銘に為阿闍利淨賢と見られる様に、墓碑としての性格を持つものであろう。他に見られる石造遺物と比較して古い時期にあたるが、この宝篋印塔の時期と堂塚の成立時期が近いものであると考えられる。

3. 六字名号板碑

縁泥片岩製で慶長14（1609）年銘が見られ、市内の存銘石造遺物では古い部類に入る。

残存高は115cm、最大巾49cm、最大厚7cmを計る。下方で折れており下方部はコンクリートによって固定されている。原位置であるかは不明であるが、本来はもう少し長いものであったことは間違いない。又、背面は火をうけている。

この名号碑の注目しうるのは単に古さと言ったものではなくその銘に見られる極楽山大念佛寺である。大念佛寺は現大阪市平野区に所在する融通念佛宗の本山である。融通念佛宗は摂津・和泉・河内・大和・伊賀・山城に見られる小規模な教団であり、その成立は平安末期に比叡山大原別所に於いて融通念佛を唱導した良忍を始祖とし、法明上人（1279～1349）が中興そして融觀大通（1649～1716）によって教団組織を確立したとされる。この為三人を三祖として仰いでいる。

しかし乍ら、成立こそ平安末期であると言えるものの実際に宗派として正式に認められたのは元禄元（1686）年に宗門再興の名目で幕府の公許を得た時と言える。融通念佛宗は他の教団とは違った成立過程を過ている。即ち、融通念佛が勸進聖によって宗派を越えて村々に講といった形で広がり一宗派として確立された歴史を持っている。この為、他には見られぬ教団組織を持ち不明な点も多い。

この碑自体は慶長14（1609）年に教団中興の祖たる法明上人の回向の為に造立されたと考えられる。しかし、大念佛寺が寺院として平野郷に建営されたのは元和年間（1615～1624）とされ、そまでは法明上人授与とされる本尊を各講内で持ちまわる引寺であったと考えられる。しかし、慶長14年には大念佛寺が定堂を持たぬ形でありながらも寺院としての名称を持っていたと言えよう。

この碑自体の存在は、上原村周辺が融通念佛宗六別時の一つである錦部別時を構成していたことを示すものである。更にその辻本である錦渓山安養聚院極楽寺が別時の引道場であった時期の信仰形態、引いては融通念佛宗の成立過程を知る何らかの手掛りとなるものである。

4. 方柱石塔

三基ともに戒名が刻まれている。延宝2（1674）年銘、宝暦6（1756）年銘のものは砂岩、寛保2（1742）年銘のものは花崗岩製である。いずれも墓碑としての性格を持つものであるが、かつて塚穴古墳が墓地となっていたとは考えられない上、現在一番近い墓地にも800m程度離れていることからも、墓碑というよりも追善供養の為に、の地に建立されたものと考える方が妥当であろう。

又、寛保2年銘のものと宝暦6年銘のものとは材質・形状に差はあるものの、戒名が酷似していることと時期が接近している点などから両者の間に血縁等の密接な関係が考えられる。

5. 層塔

現在、墳頂部に存在する。十一層であるが本来十三重であったと思われる。相輪及び十一層は現代のものであり、基礎は宝篋印塔の笠が転用されたおり、組み順もばらばらである。材質は砂岩で最大軒巾38cm・最大高16cmを計る。時期等は不明であるが、軒の形状から見ても江戸以前のものとは考えにくい。

6. 石碑

緑泥片岩の六字名号板碑の終了に二基並んでいる。

片方にキリーク・サ・サクの阿弥陀三尊種字が見られるものの、その他には銘文等は見うけられない。

無銘のものは、高さ87cm・巾56cmを計り、上部に切り込みが見られる為、石碑と判断しうるのであるが、磨耗の為に全く銘等が見られないものと考えられる。

7. 地蔵坐像

像高40cm、台座とも花崗岩製である。

台座は単弁の八葉。現在、宝暦7年の宝篋印塔の基礎の上に乗っているが、明らかに両者は別個のものであると言える。

8. 役行者像

頭部を欠失しており、肩までの高さは33cmを計る。又、頭部は、別の地蔵像の

頭部をコンクリートで接合している。左手に経巻、右手に錫杖を持っている。材質は砂岩であり台座部を欠失し、花崗岩製の台座が転用されている。

一般に役行者像が造立される場合は、行者講・庚申講によるものと考えられる。特にこの地方は古くから大峯登山が盛んであり、村々に山上講が見られる事や、石見川上流に行者杉と称される老杉の下に役行者を祀った祠があり、現在でも毎年、祭が行われている事などからも、役行者に関する信仰が盛んであった事がうかがえる。

こう言った事からも、この像が行者講あるいは庚申講・山上講で大峯登山を記念して造立されたものと考えられる。

9. 小詞

中に径20cm程度の卵形の川原石を3つ納める。祠自体は現代のものであるが、川原石自体が、信仰対象になるのは、非常に古くから見られる事である。

丸い川原石にどう言った意味を持たせているのかを知る手掛りは極めて少ない。しかし乍ら、近世での山神あるいは、道祖神といった他の例を見れば、民間信仰の部類に入るものと考えられる。この場合は、塚穴古墳が上原村・高向村・野作村の村境にあたる上、和泉街道の道脇にあたる事からも、疫病神あるいは厄神を防ぎ村内安全の神である道祖神であると言える。

10. 道標

現状は倒れているが、概ね原形は保っていると思われる。長さは102cm・巾15cm・厚さは18cmで「右 長野ふぢみ寺道」の銘がある。

11. その他

これらの他に、一石五輪塔を始め、宝篋印塔など、小型の石造遺物が10点程見れるが、いずれも破損が著しい。又、それらの時期は、概ね慶長以降のものととらえられる。

以上、塚穴古墳周辺の石造物の概観を述べてきたが、塚穴古墳が近世には、村内の信仰の場であると共に共同社会を構成していく上で重要な役割を果していた事をうかがわせる。又、そう言った機能を持ち始めた時期を慶長年間であると推測

出来、近世村落の成立を解く鍵となりそうである。

案外見落とされる事の多い近世石造物も、各地域の近世史の側面を見る好資料となり得ると言えよう。

IV. 条里制について

1. 錦部郡の条里について

旧錦部郡の郡域の大部分は山間部で占められている。この為従来の条里制研究においては、積極的な復元はおこなわれていない。

地形図、航空写真からこの地域を観察すると石川の河谷域、高向、上原、三日市などの河岸段丘上的一部分に直交地割が見られる。石川の河谷域の条里は石川郡の条里地割とほぼ同方向（正方位）をなし地割自体は連続するようである。ところが、高向、上原、三日市の地域ではそれぞれ各地形にそくした方向をもつようである。

2. 条里の復元

A. 坪の配列について

錦部郡の条里復元は石川の河谷域、富田林市域での復元が試みられている。この中で、富田林市市北甲田、毛人谷において小字名に四の坪、五の坪、八の坪が残存している。この配列から、北東隅を一の坪として西へ進む坪配列であるが千鳥式配列か平行式の配列かは不明である。しかし、条が東から西へ、里が北から南へと進むことは確実である。近接する石川郡条里とは条の進む方向が逆となっている。しかし、他の錦部郡の地割が地形に規制されている為、同一方向の方形のメッシュを被せねることはできない。

河内長野市域でも小字名に高向地区で柳坪、一の坪、向野地区でイシガ坪、下里地区でヤナツボ、小山田地区で八の坪、八が坪等が散見できる。しかし、これだけでは坪つけ配列までは復元できない。

B. 条里呼称について

条里呼称は主に文献中に見ることができる。特に平安時代の寺院文書の莊園記事に見ることができる。錦部郡では觀心寺文書の縁起資財帳元慶七年（882年）

第3図 地割図



に錦部郡二処として高田荘の記載に一条川原里、九条大野里、十条社里、久保田里、宮道里、佐田里がある。また、岩清水文書の太政官牒延久四年（1072年）に
夷処 字甲斐伏見庄 錦部郡 として甲斐庄の記載の中に宮道里、社里、狭田里、正里、久保田里、堅田里、拾武条天野里、そして、伏見庄の記載に楓木里、川原里、山守見、中島里、正里、猪垣里、蝦野里、萩原里、井尻里、大野里、角田里、佐田里、久保田里、天野里、畠田里、山田里が見られる。これらから条が一条から十二条までは確実に呼称として用いられているようである。里については石川郡と同様に固有名詞が用いられている。この里名の中に現存する地名が存在する。天野里一天野、久保田里一高向に上久保・クボ、喜多町にクボタ・クボ、川原里一汐の宮町に上川原・シモガワラの小字名がある。

C. 上原、高向地区の地割

この両地区は市域のなかでも条里景観がよく残存しているところである。この両地区は西条川の河岸段丘状に位置し、段丘の南にヤナギツボ、一段下った錦町の境にイチノツボの小字名がのこっている。現地形から方格地割を復元すると、水路の方向からN-34°Eの方向を示す約3里分の地割が存在するようだ。里、条境は確定できないが、おそらく小字の坪名の位置からA-B、C-D、E-Fのラインが坪境に相当するものと考えられる。条、里境は現状からは明確に確定できないが、しかし、イチノツボの小字名の位置からFの付近に位置するであろうと予想される。つまり、西条川側の西岸から上原遺跡の西北の丘陵縁までに一里分が収まる。

上記のように市域の条里制については今後の詳細な資料収集と発掘調査により判明することと期待するものである。

V. まとめ

1. A・B・C・D1トレンチについて

分布調査では遺物を採取しなかったところであり、当初から遺構の存在は稀薄く考えられたところである。

試掘調査の結果ではAトレンチの北側でおそらく水田遺構と思われる堆積状況があった。また2~3のピットも確認された。しかし、全体的には擾乱が多く遺

構は稀薄であった。この調査地域は從来は河内長野でも条里制が良好に残っている地域である。この為、条里制に關係する遺構の可能性も考えられたが、結果としては確認できなかった。このことがただちに条里制が施行されなかつたという結論にはならず、現代の地割がそのまま古代の地割を継承してると考えたほうが妥当のようである。つまり A トレンチの北側（谷状地形となっていると予想される。）には下層の水田と考えられる遺構が存在したが、他のトレンチでは地山のレベルが徐々に高くなってきており、水田が現代のものと重複している可能性がたかい。

2. D 2・E・F トレンチについて

各トレンチは現塚穴古墳の墳丘に設定した。

現塚穴古墳は市内ではふるくから知られた古墳であるが、地元の伝承では大坂城築城のさい石材にする為、一度壊され再び築き直しているとのことであった。試掘の結果は伝承を裏付けるように、現墳丘盛土中には近世瓦片が交っていた。また石室の石積みは不安定で、石材はクサビの跡を残したもので明らかに元来の古墳の石材を割って積み直しているようである。また、F トレンチの試掘結果からも現石室の基底面に花崗岩の長方形の加工石を付設しており、更に基底層も耕土並びに浅黄色玉石交りとなっており、現墳丘は再構築されていることが立証された。しかし、D 2・E トレンチの灰色シルト質粘土は再構築前の古墳の墳丘残存部の可能性が高い。

現墳丘は現在、地元の民間信仰の対象となっており、墳頂部には十三重の石塔が建てられている。現石室開口部の南側には小さな祠と江戸時代前半の宝篋印塔、板碑などの石造物がたてられている。いずれも年月を経ているようで十三重の石塔は積み直しがなされている。板碑には慶長14年（1609年、江戸時代初期）の年号が刻まれており、古墳の再構築の年代との関係が注目されるものである。

3. 結果

試掘は区画整理事業の予定面積に比較して極めて狭い面積であった。そのうえ分布調査における遺物集中地点より離れていた為、遺構の存在はほとんど確認されなかった。また、遺物の出土も皆無であった。この事は試掘地域に関しては遺

構の存在する確率は低いと考えられる。

しかし、塚穴古墳に関しては現墳丘が類例のない江戸時代の再構築であるが、D 2・F トレンチの地山直上層が再構築前の古墳の残存墳丘の可能性が高く、現墳丘周囲 5 m は注意しなければならないであろう。また、分布調査での B 地区は谷状地形と予想されるが、現水田の下層に水田の存在する可能性がある。区画整理事業予定地の埋蔵文化財の有無の結論はやはり分布調査での遺物散布集中地点での試掘結果が重要なポイントとなり、今回の調査地の結果においての判断は予定地全域には該当しない。

〔参考〕

試掘調査前の分布調査における遺物の分布調査

種類 地点	土師器	須恵器	瓦器	陶器	磁器	染付け	サヌカ イト片	瓦類	備 考
1				6		25		4	銅錢1(種別不明)
2		2							
3							1		
4	1			1					
5	2			2					
6	1			1		1			
7	1			2			1		
8	3			1					
9		1							
10	4	1					1		
11				3		2			
12	2								
13				2					
14	1								
15	1			1					
16	1								
17	1								

第1表 A地区採集遺物一覧表

種類 地点	土師器	須恵器	瓦器	陶器	磁器	染付け	サヌカ イト片	瓦類	備 考
1	1								2
2	2								
3	1			5		4		1	
4	24	1		1					鉄釘?
5	2								
6	9								
7	4			1					
8	8	2		5		1	2		
9	2			7		4			銅錢(寛永通宝)1

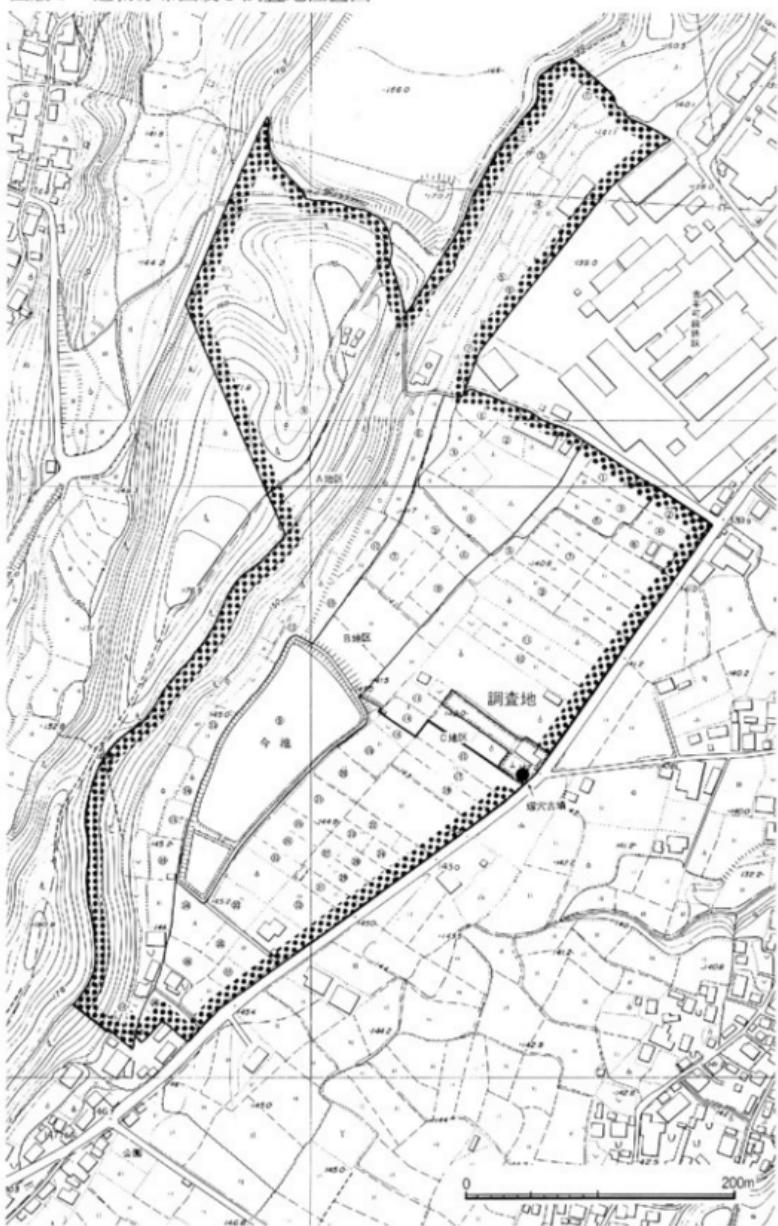
第2表 B地区採集遺物一覧表

種類 地点	土師器	須恵器	瓦 器	陶 器	磁 器	染付け	サヌカ イト片	瓦 類	備 考
1	11	1					1		円筒埴輪？1
2	5			1			1		
3	2			3		2			
4	2						1		
5	1								
6	1								
7	3								
8	1			2		1			
9							1		
10	1			1			1		
11	1	2		1		1			
12				4		1			
13	1			2		1	2		
14	5	1							鉄釘1
15	22			7		2		1	形象埴輪？1
16	3						1		
17	9			2		3		1	不明土製品1
18	4			4		1	3		
19	9					1	2		
20	7			1		1	1		
21	1		9		2	7	4		
22	9			1		1			
23	10		1	4					
24	8								
25	4		1	1	2		4		チャート片？1
26	9			4			3		型作り土製品1
27	1			1					
28	5								
29						1			
30	15			7			1		銅張り鉄板1
31	2			2					
32	8			1					
33	8			9		1		1	
34	3			1					
35	1								
36	2								
37	2								
38	3			2		1			

第3表 C地区採集遺物一覧表

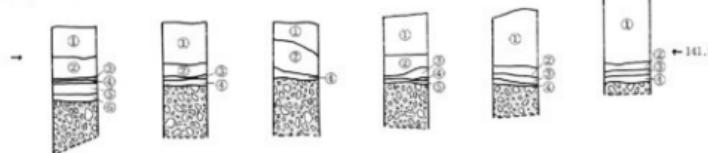
図 版

図版1 遺物分布図及び調査地位置図

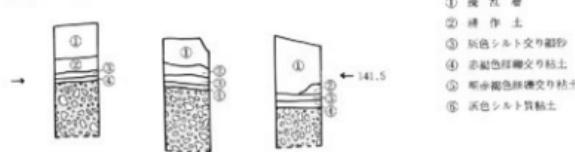


図版2 トレンチ断面模式図

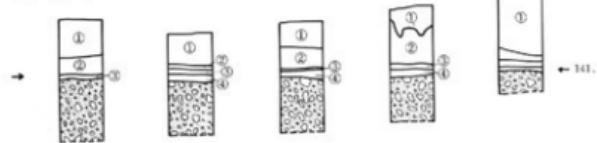
A トレンチ



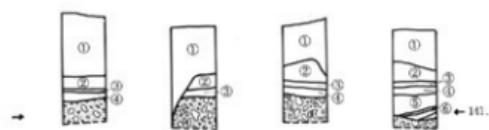
B トレンチ



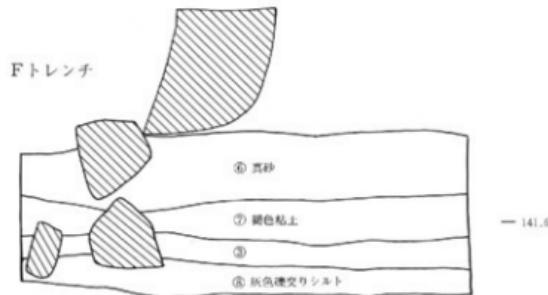
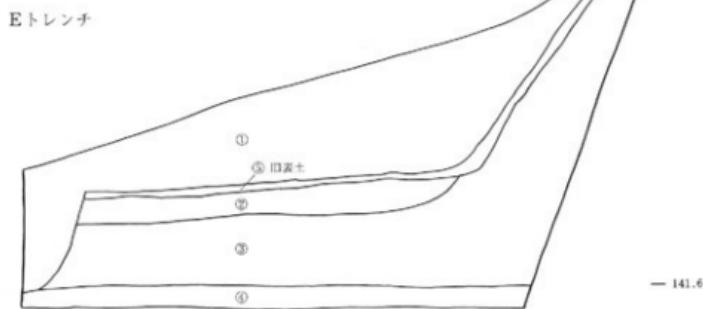
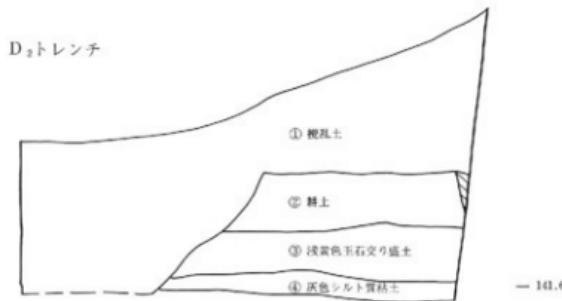
C トレンチ



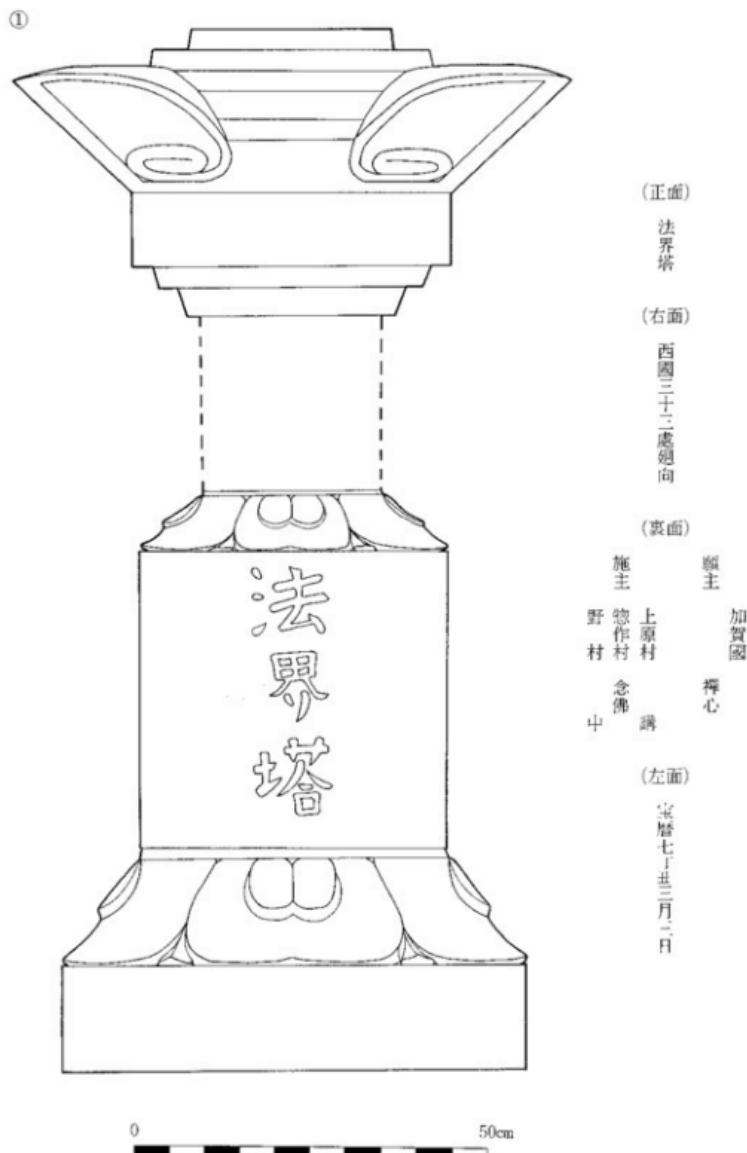
D₁ トレンチ



図版3 トレンチ断面図

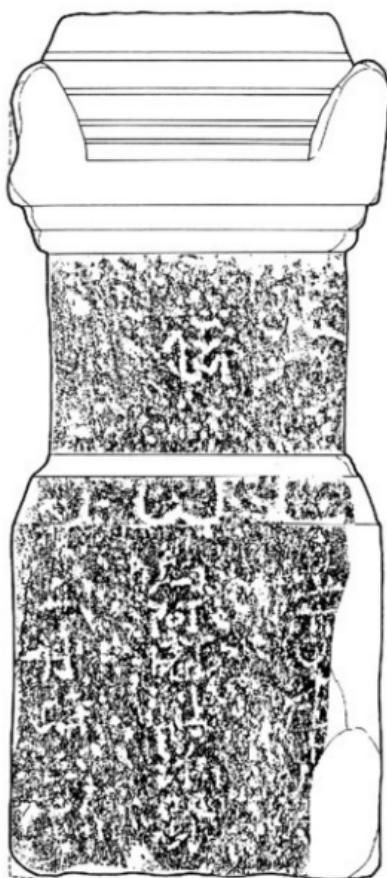


図版4 石造遺物実測図（宝鏡印塔）



図版5 石造遺物実測図（宝鏡印塔）

②

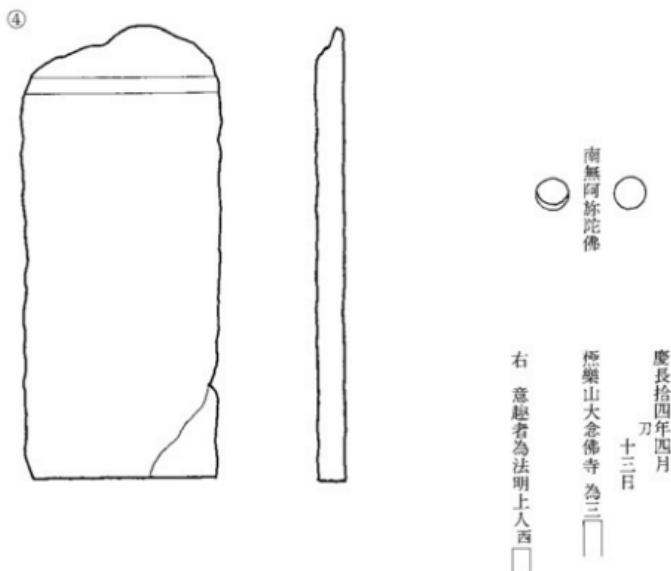
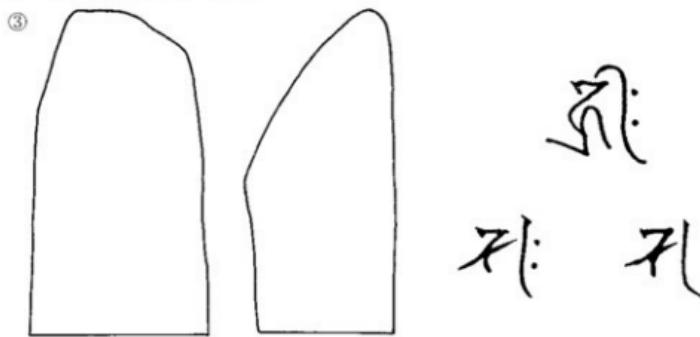


元

為
阿闍梨淨賢
慶長
二月廿四日

0 10cm

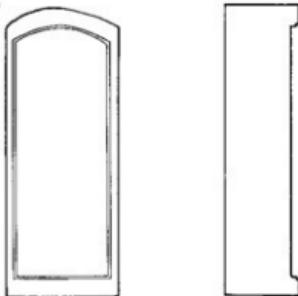
図版6 石造遺物実測図（板碑）



0 50cm

図版7 石造遺物実測図（方柱石塔）

⑤



五孔

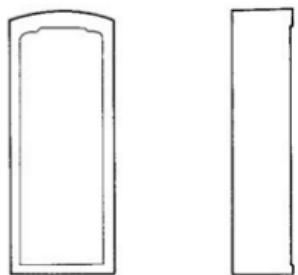
詠月妙秋信女

了通祐存信士

元禄九丙子九月十六日

延宝二甲寅八月廿二日

⑥



(正面)

(右)

五孔

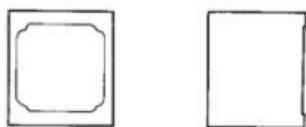
如月祐順禪士

位

如月妙順禪尼

寛保二年

⑦



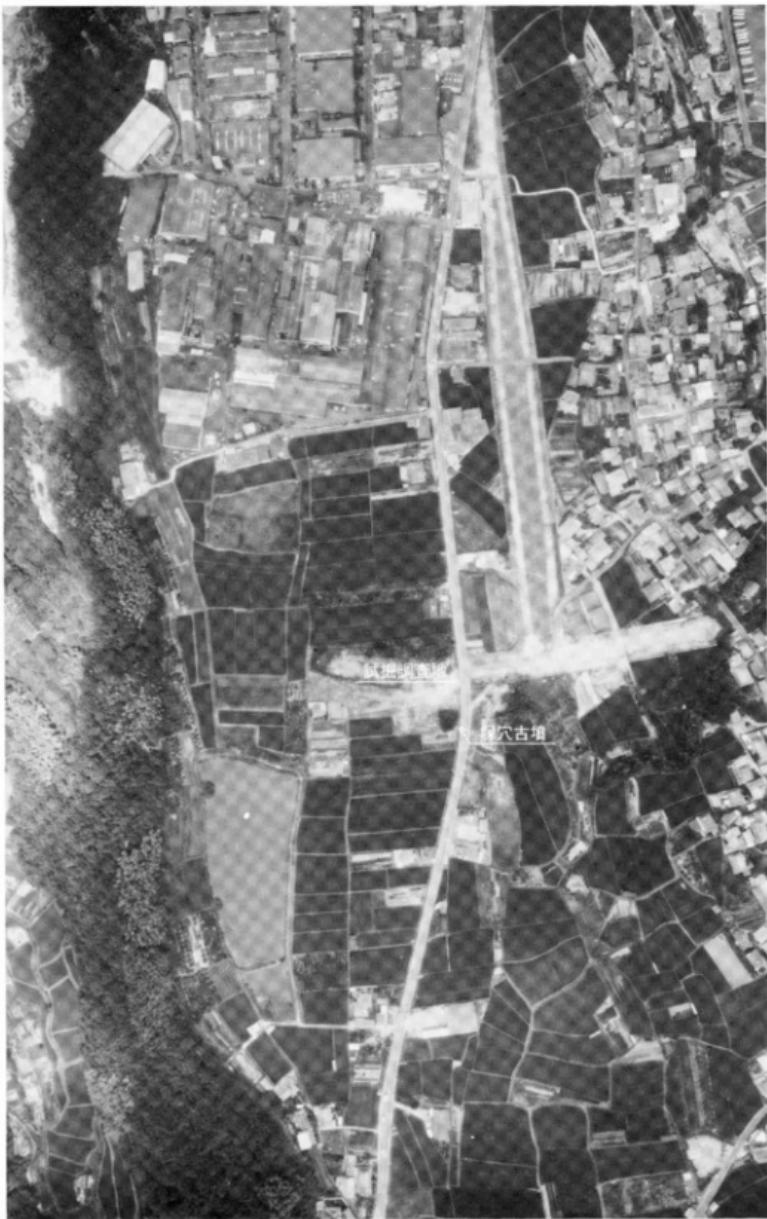
如月妙順大師
八月十三日

宝曆六丙子年

0

50cm

図版8 上原遺跡航空写真



図版 9



調査地遠景



調査前

図版10



A トレンチ



B トレンチ

図版11



C トレンチ



D₁ トレンチ

図版12



D₂トレンチ



Eトレンチ

図版13



F トレンチ



図版14



塚穴古墳及び石造遺物



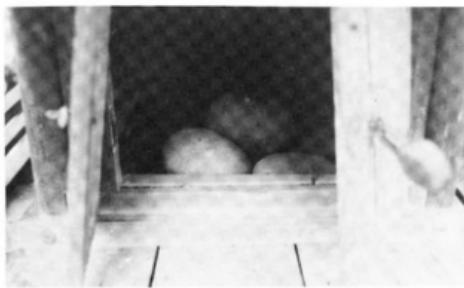
図版15

①



層塔

②



道祖神

図版16

④



石碑

③



②



図版17

⑤



⑥



⑦

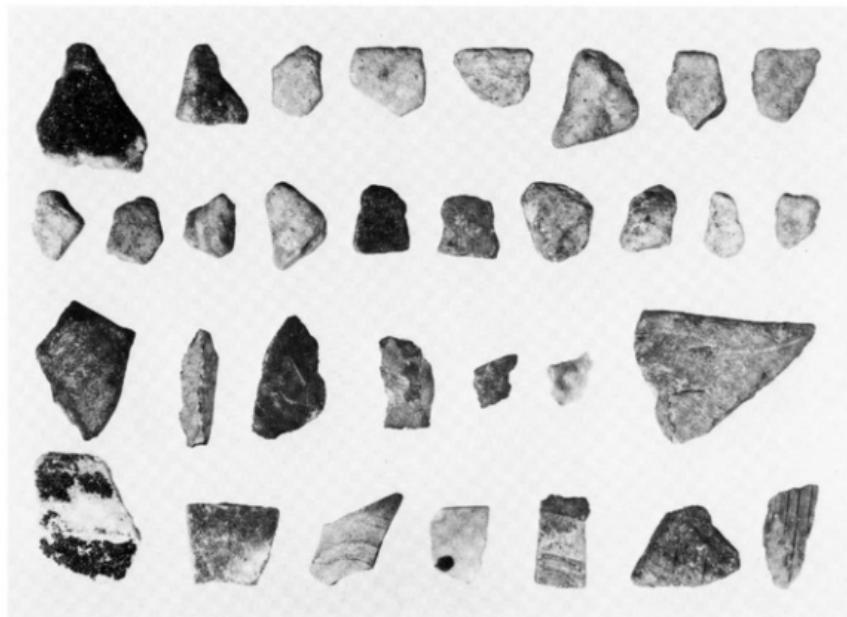


役行者

図版18 分布調査採集遺物



A-1 地点採集遺物 (左上のみ瓦、他は陶磁器)



C-21地點採集遺物 (上2列は土師器、3列目左側の5個はサスカイト片、他は陶磁器)

